

世界につながる華語、東南アジアとつながる台湾語



海外交流

林 初 梅*

The World's Mandarin Chinese Connection,
Southeast Asia's Taiwanese Language Bond

Key Words : Taiwan, Singapore, Mandarin Chinese,
Taiwanese language, Lee Kuan Yew

社会言語学の定義に従えば、私の母語は台湾語で、第一言語は台湾華語である。これから異郷のシンガポールで出会った私の言語体験を紹介するとともに、台湾語と台湾華語の行方について考えたい。

台湾華語はシンガポール華語と同じ中国語であるが、移住先で現地語との接触による変化が起きたため、相互に異なる語彙や文法があって、中国の普通話とも異なる特徴を持っている。一方、台湾の台湾語は、シンガポールで「福建語」と呼ばれている。いずれも遠い昔に中国東南沿岸部の福建から来た移住者の母語である。

1. シンガポールの福建語と華語

2018年3月にシンガポールを旅した私は、偶然にも何人かの福建語話者に出会った。

初めてのシンガポールなので、右も左も分からない私が、半日しか滞在しないという厳しいスケジュールの中で、移動手段として選んだのはタクシーだった。正しい判断かどうか、分からないが、意外な収穫があった。それは台湾語との出会いである。

まず、空港を出てタクシーに乗ってホテルに向かった時のことである。60代ぐらいの華人運転手との会話が台湾語だった。初めは中国語で会話を交わしていたが、福建語が出来るかと尋ねたら、もう福建語しか喋らなかった。30分程度の会話だった。

聞き取れなかった単語もあったが、デジタル化すると、90%ぐらいの内容が通じていて嬉しかった。

ホテル到着後、私は、市内でもタクシーを利用した。私は、毎回、福建語が出来るかと確認した。インド系の運転手を除き、6、7人ほどの全員、福建語が堪能だという印象を受けた。シンガポールで台湾語が通じるという話はよく耳にしていた。にもかかわらず、全人口のなかでどれぐらいの割合を示しているか、統計データがないため、イメージがつかめていなかった。また、どのぐらいのレベルで喋れるかも分かっていなかった。

よく知られていることだが、シンガポールは多民族・多言語社会である。1965年独立時にシンガポール政府は、マレー語を国語に、そして四つの言語を公用語に指定した。四つとは、英語、華語、マレー語、タミル語である。

人口の75%は華人である。主に中国の福建、広東、潮州、客家、海南からの人たちが、最も多いのは福建の出身者である。1980年の統計資料によれば、福建人は全華人人口の43%を占めており、以下、潮州22%、広東16.5%、客家7.4%、海南7.1%という順となっている。つまり、シンガポールの最大方言集団は福建語なのである。

大ざっぱに言えば中国東南沿岸部からの移民が多く、シンガポール華人には母語と華語、又は母語と英語のバイリンガルが多いが、近年、実用主義という観点から華語と英語を学ぶことが主流というイメージである。しかし旅の経験で、福建語を日常的に喋っている人口はまだ一定程度いることがわかった。

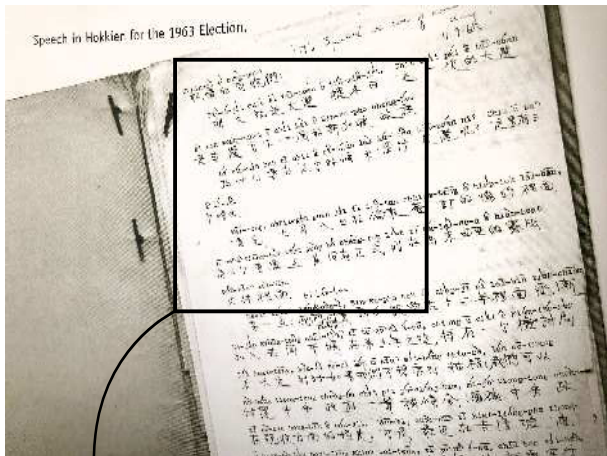
その後、偶然に大学院時代からの友人・蔡承維さんにシンガポール初代首相リー・クアンユー（李光耀）の自伝を見せていただいた。中に直筆の漢字で書かれた選挙演説原稿（1963）の写真があり、ルビが振られている。驚いたことに、そのルビがなん



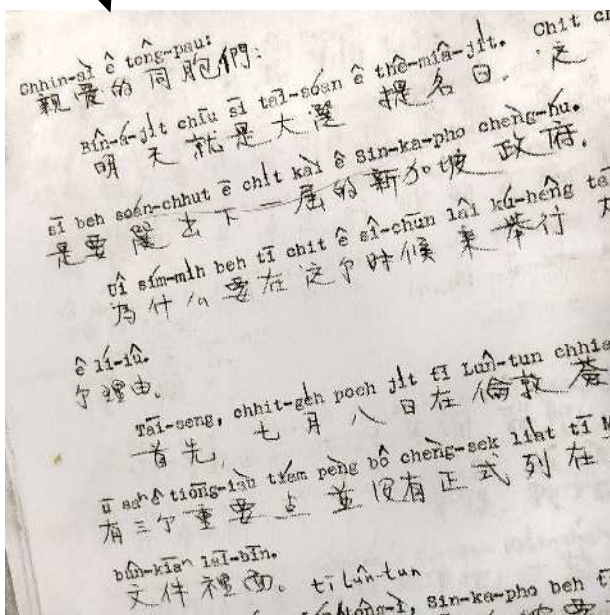
* Chumei LIN

一橋大学大学院 言語社会研究科言語社会専攻博士課程修了
現在、大阪大学大学院 言語文化研究科
言語社会専攻 准教授 博士(学術)
TEL : 072-730-5244
FAX : 072-730-5244
E-mail : chumei@lang.osaka-u.ac.jp

と中国語の発音ではなく、福建語の発音だった（写真）。それがきっかけで私はシンガポールの華人社会における福建語の位置づけに好奇心を持ち始め、さらにシンガポールの言語政策を手掛けた初代首相のリーの言語観にも興味を持った。



福建語による選挙演説原稿(1963)



(一部分拡大)

2. シンガポール初代首相リー・クアンユーの言語観

リー・クアンユー（1923-2015）のルーツは広東省梅州市にある。客家系華人の四世かつ英語派華人でもあり、中国語より英語が堪能である。リーの首相就任以来、同国は英語重視が決定的となったが、しかし、それは、英語がシンガポール国内において民族的・宗教的に中立な言語だったことと、シンガ

ポール国外とも繋がる言語だったこととによる。リーは、華人の華語能力も極めて重視する政策をとり、一貫してバイリンガル教育の理念を追求したことで知られる。華人の場合、「経済・仕事言語」としての英語、「文化言語」としての華語のように二言語を習得するべきだという言語観を打ち出していたのである。

多言語能力を持っていたリーは、英語が第一言語でありながら、華語も流暢であった。自伝によれば、台湾の新聞も中国首相の演説原稿も知らない単語がないくらい読めたという。自伝にはさらに、英語が生まれた時からの言語であり、6才以降の教育言語でもあったことが書かれている。他の言語の学習開始時期は、ラテン語が15、6才、華語の漢字学習が18才、日本語が19才、華語のスピーキングとリスニング学習が32才、福建語が38才、客家語が41、2才であったとも書かれている。しかもマレー語もできたという。

福建語の能力は1980年前後何回か台湾を訪問したリーのエピソードから窺える。台湾総統・蔣経国と一緒に農村を視察に行った時の話だが、リーが流暢な福建語を操って台湾の農民に接したのである。「親民」総統のイメージを造ろうと努力していた蔣経国にとって、台湾人との間に言語の壁が大きく存在しており、その壁を破ることができず悔しい思いをしていたことが知られているが、リーの達者な福建語を見て相当羨ましく思ったようである。

但し、リーは、福建語と華語を相当苦勞して身につけたという。自伝によれば、1954年に30代のリーは人民行動党を代表して国会議員選挙に立候補し、当選したが、当時、華語も福建語もできず、そのせいで民衆との距離は大きく、そのことを相手陣営からも批判されていた。その後、1961年の選挙に臨んだリーは、有権者の心を掴むために、福建語の勉強を始めた。必死で勉強した結果、1963年にもうハイレベルな福建語で選挙演説を行うことができたという。

しかし福建語はシンガポールの公用語にされず、むしろ公の場から追放されてしまった。リーがデザインした言語政策に起因したのだと思われる。台湾の場合は中国からやってきた国民党政権の支配下になったため、国語の地位は、台湾語ではなく中国語が占めた。シンガポールの場合も、植民地支配から

解放され、しかも現地の華人首相が誕生したにもかかわらず、やはり福建語は国民統合を阻害するものだと見なされ、排除されたのである。

1979年に、リーは大々的に華語キャンペーンを推進し始めた。英語に加えて華語も重視されたのは、言語の実用性からであったが、英語は華人以外の国民への配慮であり、華語は福建系以外の華人への配慮であるという国民統合の理由も大きい。

福建語を犠牲にしたことについて、晩年のリーは後悔していないと語っている。「過去（方言）に拘らず、未来（華語）を見るべきだ」という信念を持ち続け、英語主流による華語軽視の傾向を懸念して、華語の重要性を国民に語り続けていた。

自伝中の次の言葉が印象に残った。「中国語と中国文化を十二分に把握していても中国の13億人と勝負するのは難しい。中国人が必要とするのは中国語も英語もできるシンガポール人である。流暢な英語と中国語で13億の中国人を世界に繋げるシンガポール人が必要とされている。」シンガポールの言語政策は、福建語の文化的アイデンティティよりも華語と英語の実用性を優先したリー・クアンユーの言語観が反映されている。

3. 台湾華語と台湾語の行方

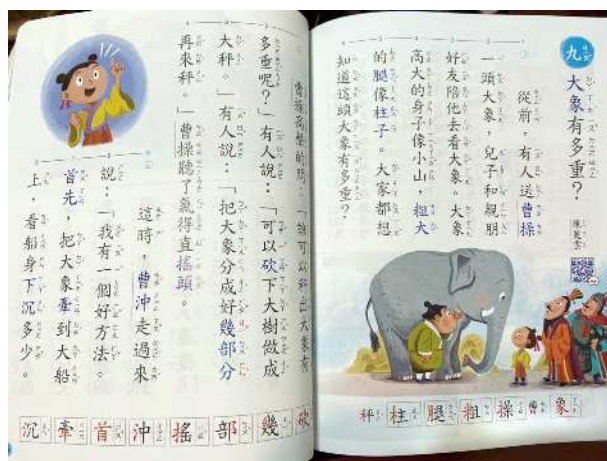
さて、台湾に生まれ育った私としては、台湾華語と台湾語をどのような位置づけにしていけばよいのか、シンガポールの経験からいろいろと考えさせられている。

台湾語と台湾華語は文字通り、台湾の言葉であるが、様々な名称がある。台湾語は台湾のエスニック言語の一つで「閩南語」、「Holo語」ともいう。総人口の約73.3%を占める閩南系台湾人の母語である。ほかにも客家語を母語とする集団（12%）と原住民語を母語とする集団（1.7%）、そして外省人（戦後中国からの漢族移住者、13%）の集団がある。マジョリティ言語とはいえ長年、方言扱いとされていたため、母語能力を保持していない若者が増えているのが現状である。日本敗戦後の1945年に国民党政府に接収されて以来、台湾人は「国語」至上主義の下で中国語を学ぶことになったのである。

学校で中国語を習い、家で母語を使うという二言語併用の生活を送った結果、ある年齢以上の人は母語と中国語の両方が話せるようになった。私もその

なかの一人で、小さい時から中国語が全くできない祖母と台湾語で会話していて母語能力が鍛えられてきた。しかし若い世代の台湾人は中国語だけで家族とコミュニケーションがとれるため、母語能力が低下しつつある。同様に、客家語話者も原住民語話者も少なくなっている。それを食い止めるため、台湾では2000年以降週に一時間ではあるが、小学校の母語教育を導入している。台湾語、客家語、原住民語の中から一つ選んで履修するようになっており、リー・クアンユーの言語観と真逆な風向きとなっている。

一方、中国語は台湾で「国語」と呼ばれているが、近年「華語」という呼称に替わる傾向にある。台湾意識が高まる中で、多くの母語推進者は、国語至上主義の価値観に対抗し、従来「国語」と呼ばれてきた中国語を「華語」と呼ぶように改めようと運動しているのである。それは各エスニック言語の位置づけを同等なレベルに上げようとするための戦略的な手段でもある。ただし、なかなか定着されない現実がある。



台湾小学校二年生の国語教科書

その華語が台湾人アイデンティティと結びつきつつあるという現象についても触れておきたい。台湾華語と中国の普通話の違いは、イギリス英語とアメリカ英語の間にある違いのような程度でしかないが、ただ、写真（小学校二年生（上）の国語教科書[2020年8月・康軒出版]）のように、繁体字と独自の発音記号とを使用しているため、見た目は中国の普通話と異なる特徴を持っている。また台湾のエスニック言語との接触による語彙・表現の変化など

の独自性も生じている。そのため、本来アイデンティティと直結するはずのエスニック言語だけでなく、台湾華語もまた台湾人のアイデンティティと結びつく、という現象が起こっているのである。その背後には、戦後七十数年経った今、台湾華語が若者の母語と第一言語になり、台湾で最も普及している言語になっているということもある。

「過去に拘らず、未来を見る」というリー・クアンユーの言葉が私には魅力的に響く。台湾語に拘らず、台湾華語という、アイデンティティの形成に機能する新しい要素に注目することを促しているように思えるからである。台湾において、エスニック言語でなく、台湾華語が若者の母語と第一言語とになる、という時代が到来している。私は、それに向き合わねばならない現実の中にいる。そのことが、まさに私をリーの言葉に共感させているのである。

ただし、消失しつつある台湾語、客家語、原住民語の現状を考えるとやはり寂しい。私のなかにはまだ大きな葛藤がある。この秋、北海道にあるアイヌの民族博物館ウポポイに行ってきた。アイヌ語の音声資料の展示に囲まれながら、私は、ふと、台湾の

エスニック言語が、将来博物館でこのような形で展示されるようになることを想像してみた。すると、想像するだけで大きな喪失感を覚えた。

シンガポールにはシンガポールの事情があるが、そこで出会った台湾語は私にとって一生忘れないものである。台湾語が通じたという喜びが心の糧となったからである。世界に繋がる華語の実用性は魅力的かもしれないが、東南アジアと繋がる台湾語もかけがえのない存在であった。多様性にこそ台湾文化の豊かさが裏打ちされているのだと感じている。実用性、国際性ばかりではなく、伝来の文化的価値とのバランスも大事にしていきたい。私は、いまそのように考えている。

参考文献：

李光耀 (2015) 『李光耀回憶錄：我一生的挑戰 新加坡雙語之路』 台北市：時報文化

Lee Kuan Yew (2005), *KEEPING MY MANDARIN ALIVE: Lee Kuan Yew's Language Learning Experience*, World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd. and Global Publishing Co. Pte. Ltd.



リー・クアンユーの自叙伝